

水稻 今後の管理について

気象庁が5月24日に発表した3か月予報では、7月と8月の気温はほぼ平年並み、降水量は平年並みが多い見込みです。近年、極端な気象となることが多いため、今後の気象情報に十分注意し、生育に応じた栽培管理を心掛けましょう。

1 水管理

水稻の生育段階に応じた水管理を行い、適正な茎数と根を健全に維持することで、登熟歩合の向上による収量確保を目指します。

(1) 中干し

過剰な分けつを減らして倒伏や病害の発生を抑制するとともに、根の活力を維持するため、中干しを行います。

田植え後30日頃を目安に、茎数が1株あたり20本程度となったら実施します。期間は7〜10日間前後、田面に小さなひびが入る程度になったら水を入

れます。

(2) 出穂期前後・登熟期間

穂肥施用後は水分を必要とするため湛水状態を保ち、出穂期前後それぞれ7日間は深水管理を実施します。その後は出穂期後30日までは、1週間サイクルで湛水と落水を繰り返す間断かん水（4日間湛水後、3日間落水など）とし、根を健全に保ちつつデンプンの蓄積を促します。

2 穂肥

穂肥を施用することで、もみ数を増やすことによる収量向上や、稲の活性を維持することによる登熟の改善（高温障害防止）を図ります。

穂肥は出穂前20〜25日を目安に生育診断（葉色や幼穂長）に基づいて行います。品種やほ場条件によって施肥量や施用時期を調整してください。

肥料切れにより葉色が極端に低下してしまうと、穂肥を施用しても葉色が

戻るまでに時間がかかります。高温時には稲体の消耗が激しくなり玄米の外観品質低下を招きます。また、遅い穂肥は食味低下を招きます。穂肥は適期に適量の施用を心がけましょう。

3 病害虫防除

(1) 稲こじ病

穂ばらみ期〜出穂前の低温、寡照、多雨で発生が増加します。生産物に被害粒や被害粒が混入すると農産物検査で規格外となり、経済的に大きな影響をもたらします。前年に本病が発生したほ場では、出穂2〜3週間前に薬剤散布で予防しましょう。発生した場合、は色彩選別機による除去が効果的です。

(2) 紋枯病

昨年多発した病害で、進行すると病斑が上位葉まで進展し、収量・品質が低下します。密植や多肥栽培等による過剰分けつが株内の多湿を招き、高温で発生が増えます。

前年に本病が発生したほ場や「彩のきずな」などの分けつが多い品種では、

適切な中干しによる過剰分けつ防止や幼穂形成期から穂ばらみ期にかけての薬剤散布で防除しましょう。

【主な品種の穂肥施肥時期と施肥量の目安】

品 種 名	移植期	穂 肥	
		施用時期	施肥量 窒素成分/10a
キヌヒカリ	6月22日	7月29日頃 (出穂前20〜23日)	2 kg
彩のきずな	6月22日	7月21日頃 (出穂前25日)	2 kg
彩のかがやき	6月22日	7月31日頃 (出穂前25日)	2 kg

※穂肥の施用時期は、令和元年埼玉県主要農作物奨励品種特性表の出穂期平年値を参考に算出しました。今後の気象条件やほ場条件により、この日付から変動することがあります。

(大里農林振興センター農業支援部)

